opusdei.org

# まなざし

# 2017/08/18

キリスト者の生活とは、常にイエスを探し求め、彼に従うことです。イエスを見た者は御父を見た[1]のであると弁え、また主に自分を見ていただくようにします。主はご自分の教

会に留まり、私たちが主に目を向けることをお待ちです。ミサ聖祭において、主を仰ぎ見ることがでうった、聖別されたパンとぶどう酒があれます。毎日私たちは、毎日私たちは、毎年と御血、御霊魂、神性をともうちばなと御血、御霊で聖体の秘跡のうまた。1[2]実際にご聖体の秘跡のうまたおられる主と出会うようにもしています。

「イエスの喜びに満ちたまなざしは どんなだろう。御母の押さえること のできぬ喜びに満ちた、輝くがごと きまなざしと同じはずだ。『私の魂 は主を称える!』自分の体内に受け入 れ、そしてそばに連れ添いはじめて 以来、聖母の魂は主を称え続けてい る。

わが母よ!御身がそうであられたように私たちも、主と共にいて手を手放さぬ喜びをつねに保つことができますように。」[3]

### 神のまなざし

「この神のまなざしの源を尋ねるなら、創世記に立ち戻って、神が人間を男と女につくられたとき、神はかれらを見て『それは非常に善いものであった』と言われた箇所にいかねばならないでしょう。」[4]

託身されたみことばは、人としての 目と表情で私たちをご覧になってい ます。私たちはイエス・キリストの まなざしに喜び、無条件の愛を感 じ、愛されていると実感し心は平安 に満たされます。さらに、主のまな ざしのうちに人間の真実の姿を見出 し、本当の自分自身を悟ります。私 たちは神の愛によって造られ、その 愛によって存在しているのです。そ して、いつの日か主と対面し、主と 共に生きるよう予定されています。 御子が御父と一つであるように、私 たちが御子と一つになるまで全面的

に主のものになるように、主はお望 みです[5]。

ヨハネ・パウニ二世は、1985年に次のように述べておられます。「そのようなキリストのまなざしをあたがたも体験できたなら、キリストがそのような愛をこめてあなたを見つめているという真実を体験できたなら(…) キリストの愛のまなざしは、福音全体の要約・総合を含んでいるといえます。」[6]

イエスは、一人ひとりを、そして全人類をご覧になります。群衆とといるでは、十把ひとくるのではないでででででででででででででででででででです。全方のではないであるとに、の感じのないではないでは、進からも見られている。まからも見られては、進りというでは、は、御目を留められました。

す。イエスは私たち一人ひとりをご 覧になるのです。

勇気を出して贖い主に視線を向けるなら、自分の罪を痛悔し、回心と償い、そして使徒職の必要性を感じるでしょう。ペトロは、主を裏切った後、主のまなざしに出会い、自分のしでかしたことを悟りました。「そして外に出て、激しく泣いた」[8]の

です。この痛悔の後、彼は大胆な使徒となり、イエス・キリストの弟子であることを二度と隠さなかったばかりか、使徒職における障害に喜んで立ち向かいました。「イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き」[9]ました。

私たちが、主のマントに触れるだけでもと望んだあの病気の女性のように、おずおずと主に近づいたと落った。 も、主は私たちを顧みられ、落さはを取り戻させてくださいなけれた。『娘よ、元は振り向いまながら言われた。『娘よいあなたの信仰があった』その時、彼女は治った」。[10]

「私の主、私の神、あなたがここに おられ、私をご覧になり、私の言葉 を聞いておられることを堅く信じま す。|聖ホセマリアが教えたよう

に、この祈りで私たちは毎日イエ ス・キリストとの対話を始めます。 祈るためには、主を見つめ、主がご 覧になっておられると確信すること が必要です。主を永遠にはっきりと 眺めることができるのは天国におい てです。しかし、この世において も、普段の生活の中で、つまり、仕 事や家庭、人々のうちに、特に苦し んでいる人のうちに、主を認めるこ とができます。このことをはっきり と自覚できるようにご聖櫃の前で信 仰を持って、「いつも私をご覧に なっていることを堅く信じます―― と繰り返すのです。盲目になったよ うに感じ、自分の傍に主を見ること ができない時、へりくだって主にお 願いしましょう。主よ、見えるよう にしてください。

### 聖マリアのまなざし

「キリストを観想する比類のない模範はマリアのうちに見出されます。

(…)マリアほどキリストのみ顔の観 想に一心に身をささげた方はいませ ん。(…)常に敬いと驚きに満ちたマ リアのまなざしは、決してキリスト から離れることはありませんでし た。マリアのまなざしはいつも全て を見通しており、イエスを深く理解 することができました。ときにその まなざしは、神殿で少年イエスを発 見した出来事のように、問いかける ようなまなざしだったかも知れませ ん。『なぜこんなことをしてくれた のです』(ルカ2,48)と。しかし、マ リアのまなざしは、カナの婚礼での ときのように(ヨハネ2.5参照)、イエ スの隠れた感情を

見抜き、その決断を察することさえできたのです。またあるときは、特に十字架の下では、それは悲しみのまなざしだったかも知れません。しかし、それでもマリアのまなざしは、ある意味で『子を産む母親』のまなざしでした。なぜならマリアは

御子の受難と死にあずかっただけでなく、愛する弟子という新しい子を与えられたからです(ヨハネ19,26.27参照)。復活の日の朝、マリアのまなざしは復活の喜びに輝きました。そして最後に聖霊降臨の日、そのまなざしは流れ降る聖霊によって燃え上がったのです(使徒言行録1,14参照)。|[11]

「聖母の胎内の祝すべき実り」である御子と出会う準備になります。主

の御母に導かれてイエスのみ顔を探 し求めましょう。ベトレヘムでの幼 子のみ顔、カルワリオでの傷ついた み顔、復活後の栄光に輝くみ顔を観 想するのです。それは、イエスとの 出会いに全存在を傾けるよう導かれ る神のみ顔を探し求めることでもあ るのです。

「キリストのみ顔を観想しながら、 私たちは常に新たに御父の愛を経験 し、聖霊の喜びを受けて、三位一体 のいのちの秘義を受け止めるよう整 えられていきます。こうして聖パウ 口の次の言葉が私たちのうちに実現 するのです。『私たちは昔、主の栄 光を映し出しながら、栄光から栄光 へと、主と同じ姿に造りかえられて いきます。これは主の霊の働きによ ることです』(2コリント3.18)。| [12]キリスト者はキリストを映し出 すという熱烈な使命を持っていま す。聖人たちがそうでした。一人ひ とりに対する神のまなざしを表すの

です。聖体賛美式などでご聖体の主 を礼拝する時、私たちが刺し貫いた 方の血まみれで傷だらけになってい る姿を見て、そこに神の愛の秘義と 神の本当のみ顔を見出します[13]。

# 隣人に目を向ける

「幸いなるかな心の清き人、彼らは神をみたてまつらん。この主の教えに勇気百倍して、清い目で全てを見たいものです」[14]

視線やその他の諸感覚をも合わせた 存在のすべての面を聖化するよう戦 うべきことを自覚して、諸徳を実行 しましょう。目は外界に向かってる かれた、映像が「入り込んでくる 窓」だけではなく、私たちの望みが 「外に表れ」覚悟を示します。愛徳 や同情、清い心、清貧の精神や仕え る決意は、目から溢れ出るのです。

使徒職の熱意は人々の必要としてい るものを見つけ出すことから始まり ます。孤立無援、自由を窒息させる 束縛、混乱。私たち自身が隣人にな る心づもりがあるなら、その人の立 場であれこれ考えることができるで しょう[15]。それほど価値のない他 の関心事を忘れ、自分のことだけに 奔走するのを止め、善きサマリア人 のように人々の問題や心配事に関心 を向け、その解決のために時間を割 くことです。周りの人たちの霊的な 乏しさを見抜き、ふさわしい手段を

講じるには、しっかりと目を見開い ていなければなりません。

逆に不純な望みや所有熱や好奇心は、まなざしを積極的に矯め直さないなら次第に強くなり、周りの人を思いやる心を失わせるまでになります。神と人々のために視線を慎みましょう。主から私たちを遠ざける事柄を追放しましょう。それは古い人

をけしかけ、悲しい見方や利己心を 育んでしまいます。

# 見ることを学ぶ

まなざしを培うことは大切な戦いです。それは、内的世界の進歩とその質に影響を及ぼします。全てのことに神を見出し、主から引き離すようなものから逃げることだからです。

見ることを学ぶとは、観想の訓練をとなり気高くは、観想の美くくい気高に付いまる習慣が身る習慣が身るとでする習慣をであるを観想をであるを観想をできるをできるをできるという。というではないできるというではない。これではいるとができるとができるとができるとができるとができるとができるというになります。

それと同時に、この世における人生は戦いであると言われるように、私たちは常に「泥に戻る」危険にさらされています。見ることを学ぶとは、見ないことを学ぶことでもあります。聖ホセマリアは「望むべきとないことを見てはいけない」と大聖グレゴリオを引用して忠告しています[17]。

神への冒涜は様々な形で表れます。 ある時には、例えば暴力を前にする 時のように、人間的な嫌悪感を抱い て、自然に自発的にそれをはね除け ようとします。他の折りには、悪が 誘惑の形を取り、生身の人を惹きつ け、自己愛とか贅沢な望みを満足さ せようと現れることもあります。

いずれの場合にも、悪を防ぐという 受身的なことは、贖いのための償い として、常に建設的なものに変える ことができます。償いをささげるに は、そのようなことが神を冒涜して いるのだという現実をしっかりと見つめることが必要です。それも、単に煩わしい不愉快なもの、また拒絶すべき誘惑として見るだけではなく、何よりも神に背いているものとして見ることです。

イエスは「みだらな思いで他人の妻 を見る者は誰でも、すでに心の中で その女を犯したのである | [18]と仰 せになることを通して、不純なまな ざしは単に外的感覚の問題ではな く、もっと奥深くから出てくるもの だということをはっきりと示されま した。この望みは、人について間 違った見方をしていることの表れで あって、相手を尊厳ある神の娘とし て見ていない証拠です。教皇様が最 近発表された本で述べておられるよ うに[19]、他人へのまなざしが、私 自身の人間性に対する見方なので す。

清く尊敬のこもった目で他人を見る なら、その人のうちに私たち自身の 神の子としての尊厳を見出し、父な る神の子である自覚を持ち続けるこ とができるでしょう。もしその逆に まなざしが濁っているなら、私たち 自身の内的な姿もいびつになってし まいます。「使い捨ての物であるか のように、他人を受け入れたり拒絶 したりするということは、自分もそ のような見方をされるのを受け入れ るということです。自分の行為の結 果は自分に返ってくるものです。| [20]まなざしは決定的なものです。 自分が見る目で見られていると感 じ、自分が愛する仕方で愛されてい ると感じるからです。「あなたがた は、自分の量る秤で量られる | [21]

のです。

オプス・デイ創立者は、センターの 聖堂に架けられた黒い十字架に心を 向けるため、その前で射祷を唱えたり り接吻したり、お辞儀をしたたり たりすることを教えられましたな を教えられましたな を教えられましたな を教えられましたな をも目だけでも挨拶することは、 いました[22]。このことは、の 日か神のみ顔を直接仰ぎ見る希望の うちに観想生活をするよう私たち 助けてくれます。

「主よ、私はみ顔を尋ね求めます(詩編27,8)。目を閉じて、お望みの時に、神を眺める瞬間の訪れを楽しみにしています。しかも、鏡におぼといたようにではなく、顔と問とでした。ではなるの望れて見ることになる(1コサマリアの言葉には、キリスト者の望れているのです。

- [1] ヨハネ14,7参照
- [2] 『拓』684
- [3] 同上95
- [4] ヨハネ・パウロ二世、1985年3月 31日『世界の若者たちへ一国際青年 年にあたっての教皇メッセージ』7
- [5] ヨハネ17, 21参照
- [6] ヨハネ・パウ二世、1985年3月31 『世界の若者たちへ一国際青年年に あだっての教皇メッセージ』7
- [7] マルコ10,21
- [8] ルカ22,62
- [9] 使徒言行録5,41-42
- [10] マタイ9,22

[11] ヨハネ・パウロ二世、2002年I0 月16日使徒的書簡『おとめマサアの ロザリオ』10

[12] 同上9

[13] J.ラッツィンガー、ローマ2001 年I0月20日II volto nascosto e trasfigurato de Cristo会議における 講演参照

[14] 『神の朋友』175;マタイ5,8

[15] J.ラッツィンガー、L`Europa di Bendetto nella crisi delle culture p. 84参照;ルカI0,29-37 参照

[16] 同上p.81-82参照

[17] 『神の朋友』186;大聖グレゴリオ、Moralia 21,2,4参照

[18] マタイ5,28

[19] よラッツィンガー、L`Europa di Bendetto nella crisi delle culture pp.81-91

[20] 同上pp.8687

[21] マタイ7,2

[22] De Spiritu 80.82参照

[23] 『聖なるロザサオ』光の神秘、 第四の黙想

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/manazashi/ (2025/11/28)